

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：32613

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13185

研究課題名(和文)分散形態論を用いた日本語軽動詞を伴う交替現象の統合的研究

研究課題名(英文)An integrative study of alternation phenomena with Japanese light verbs within the Distributed Morphology framework

研究代表者

秋本 隆之(Akimoto, Takayuki)

工学院大学・教育推進機構(公私立大学の部局等)・助教

研究者番号：70824845

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文):近年の動詞領域研究は動詞領域を構成する主要部群、Root、v、Voice、それぞれの統語・形態・意味的役割、および、それらの相互作用の解明を目指している。本研究では、日本語の軽動詞「する・なる」を伴う諸現象を「交替」の観点から検討し、日本語における自他交替のメカニズム、および「する」と「なる」の非対称的分布に理論的説明を与えた。より具体的には、軽動詞「する・なる」は日本語動詞領域のVoiceに具現する形態であり、前者は非該当形(elsewhere form)として、後者は外項を取らないVoice主要部が動詞主要部vと局所関係にあるときに具現されると提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、日本語のVoice主要部の理論的実在性については他言語との比較などから統語的・意味的観点から保証されていたが、本研究により日本語においては形態的にもVoiceを想定する理論的妥当性が保証されることになった。さらに、本研究の提案が正しいとすれば、これまで独立して研究されてきた「動名詞」は、「動詞由来複合語」と厳密には同じシステム(主要部と主要部の併合および範疇素性共有によるラベリング)で派生されることになる。このことは、他の複合語(複合形容詞)の派生や主要部と主要部の併合におけるラベリングメカニズムの解明に大きな意義をもつことになる。

研究成果の概要(英文):Recent research on the verbal domain or argument structure has been aimed at elucidating the syntactic, morphological, and semantic roles of the heads that constitute the verb domain, Root, v, and Voice as well as their interaction. In this study, various phenomena involving the Japanese light verb "su(ru)/nar(u)" are examined from the viewpoint of "alternation," providing a theoretical explanation for the mechanism of transitivity alternation and the asymmetric distribution of "su(ru)" and "nar(u)" in Japanese. More specifically, this study proposed that the light verb "su(ru)" and "nar(u)" are realized with the Voice head, the former as an elsewhere form, and the latter when the Voice does not introduce an external argument and is in a local relationship with v.

研究分野:理論言語学、統語論、形態論

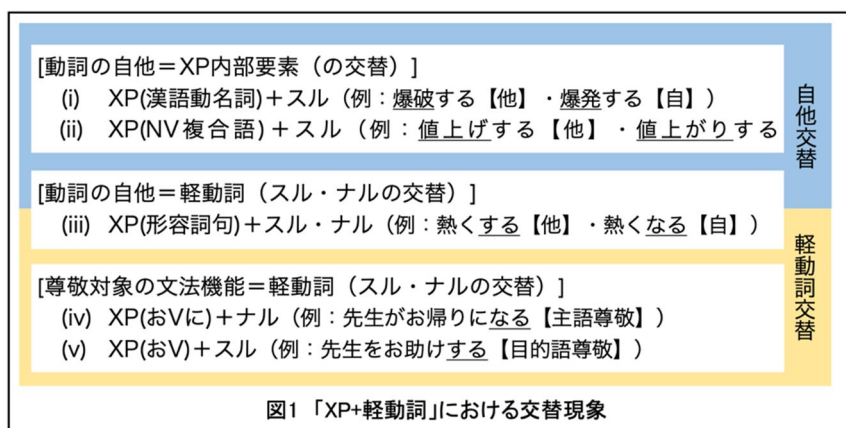
キーワード:軽動詞 自他交替 動名詞 動詞由来複合語 尊敬語 分散形態論 日本語

1. 研究開始当初の背景

動詞句は文を構築する上での核となる要素であることから、生成文法理論の誕生から現在に至るまで活発な議論がなされてきた主題の一つであり、統語と語彙(形態)のインターフェースの問題として扱われてきた。近年では、分散形態論(Distributed Morphology; Halle & Marantz 1993)という形態統語理論の誕生によって、動詞領域研究は、ますます盛んになっている。分散形態論は、すべての構造を作り出す操作を統語部門に委ねる単一動力仮説(Single Engine Hypothesis)と、形態の音韻情報は統語計算後に決定されるとする後期挿入(Late Insertion)を二本柱とする反語彙主義的モデルである。これにより、動詞の項構造(argument structure)は統語部門で扱われることになり、動詞を構成する形態の音韻形式、動詞の概念・構造的意味はそれぞれ、形態音韻部門、意味部門で扱われることになった。これまで、類型論的に異なる様々な言語の観察を通じて、動詞領域は少なくとも語根(Root)、動詞化主要部(v)、外項導入主要部(Voice)といった異なる機能をもつ主要部(head)によって構成され、それらの(または、その他の主要部との)相互作用によって、動詞の音韻形式や意味が決定されることが分かっている(Wood 2015; D'Alessandro 他 2017 など)。そのような中、個別言語における動詞領域研究の目下の課題の一つは、当該言語の動詞体系における、形態と主要部の対応関係、他の主要部との相互関係、そして、動詞構造が出力する意味情報の解明である。膠着言語である日本語の動詞体系は非常に豊かで、動詞の自他(例:kowa-g-u / kowa-re-ru)を決定する/s/や/re/のような形態、様々な要素と結びつく「スル」、使役形態「サセ」、受身・可能・尊敬・自発形態「ラレ」など様々な形態が連鎖することで動詞が作られる。このように豊かな動詞体系を備える日本語動詞領域の統語・形態・意味的特性の解明は一般言語理論に新たな知見を提供できる可能性が十分にあるが、その豊富さゆえに、膨大な研究が蓄積されているものの依然として多くの課題が残されている。その一つが、自他交替システムやスル・ナルのような軽動詞システムの解明である。本研究では、研究課題の核心をなす学問的問いとして、「日本語動詞体系において、(a)ある形態がどの主要部に対応し、(b)他の主要部とどう関係しているのか、そして、(c)動詞構造がどのような意味情報を出力するのか」を設定し、日本語の「XP+軽動詞(スル・ナル)」の形式をもつ諸現象の統語・形態・意味的特性の解明を通して、この問題に取り組んだ。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語の「XP+軽動詞(スル・ナル)」の形式をもつ諸現象を「交替」の観点から包括的に記述・説明することによって、日本語動詞領域を構成する主要部の統語・形態・意味的役割および相互作用の一端を解明することである(軽動詞としてのスル・ナルの分析については Sakai & Ivana (2004) を参照)。具体的には、図1に示す、(i)-(v)の現象を分析対象とする(NV複合語とは、名詞(N)と動詞(V)による複合語を指す)。



(i)-(v)の諸現象は、これまで、国語学や(語彙主義的な)生成文法の枠組みから独立して記述・分析が蓄積されてきたが、管見の限り、これらの諸現象に対する包括的な説明は試みられてこなかった。しかし、「交替」という観点から(i)-(v)を包括することで背後に潜む言語的関連性が浮かび上がるだけでなく、形態統語論のモデルとして分散形態論を採用することで、日本語動詞体系に新たな興味深い問題を提起することが可能となる。まず、(i)-(iii)を考えると、(i)(ii)ではXP内部要素(の交替)によって、そして(iii)では軽動詞「スルとナル」の交替によって自他の対立が起こっている。これらを「自他交替」という点で捉えると、(A)「自他の対立が、XP内部(の交替)で起こるか、もしくは、軽動詞の交替によって起こるかを決定する要因は何か」という問題

が提起される。次に(iii)-(v)を考えると、(iii)は「動詞の自他」によって、(iv)(v)では「尊敬対象の文法機能」によってスル・ナルが交替している。これらを「軽動詞の交替」という点で捉えると、(B)「スル・ナルの交替を引き起こす—「動詞の自他」と「尊敬対象の文法機能」に共通する—文法特性は何か」という問題が提起される。そして、(i)-(v)はいずれも「スル」や「ナル」を伴う現象であるが、「*値上げなる」の非文法性が示すようにその分布は自由ではない。したがって、(C)「スルとナルの出現を制御するメカニズムはどのようなものか」という問題が提起される。本研究の目的は、これらの問題の解決を通して、日本語動詞領域の統語・形態・意味的特性の一端の解明および形態統語理論に日本語から新たな知見を与えることにある。

3. 研究の方法

本研究では、図1(i)-(v)に提示した「XP+軽動詞」の形式をもつ諸現象について、「交替」という観点から提起される諸問題(A)-(C)を解決することで、日本語の動詞領域を構成する主要部 Root、v、Voice の統語・形態・意味的役割および相互作用の一端を解明する。具体的には、以下の3つの下位研究課題にわけ、それぞれの問題の解明に取り組んだ。

【1. 「XP+軽動詞」における自他交替システムの探求（平成31年度～平成32年度）】

本研究では、代表者が2018年に提出した博士論文(*The Morphosyntax of Transitivity in Japanese*, 中央大学)で提示した「自他の交替はvとその他の主要部(Voice、Res)の局所的関係によって起こる」という作業仮説のもと、(i)漢語動名詞+スル、(ii)NV複合語+スル、(iii)形容詞句+スル/ナルの形態統語的分析を開発し、「XP+軽動詞」において、自他の対立が、XP内部(の交替)で起こるか、もしくは、軽動詞の交替によって起こるかを決定する要因を解明する。

【2. 「XP+軽動詞」における軽動詞交替システムの探求（平成32年度～平成33年度）】

軽動詞スル・ナルを伴う現象については、SakaiとIvanaらによる「形容詞句+軽動詞」および尊敬語の研究によってスルとナルの統語特性に重要な示唆がなされた(Sakai & Ivana 2004, Ivana & Sakai 2007, Sakai & Ivana 2009)。しかし、ここ数年、軽動詞の具現については積極的な議論がされておらず、特に「ナル」がどのような環境下で具現されるのかという問題については管見の限り、解明の試みはなされていない。本研究では、Sakai & Ivana (2004)が主張した「スルとナルはlittle vに具現する軽動詞である」という作業仮説のもと、(iii)形容詞句+スル/ナル、(iv)おVに+ナル、(v)おV+スルの形態統語分析を開発し、スル・ナルの交替を引き起こすための(iii)-(v)に共通する統語的特性を明らかにする。

【3. スルとナルの出現を制御する言語メカニズムの解明（平成31年度～平成33年度）】

本研究は、「値上げなる」や「先生がお食べにする」などが言えないのは何故かを根本的問題として提起し、上記二つの研究成果をもとに(i)-(v)に共通する統語的特性を抽出することで、スルとナルの語彙挿入規則を開発する。

4. 研究成果

2019年度は、「XP+軽動詞」の形式のなかでも「形容詞句+スル・ナル」(例：暖かくする・なる)の形態統語的特性の解明を進めきたが、そもそもの「形容詞句」の構造についてはNishiyama (1999)の研究以来、大きな発展は遂げていないため、まず形容詞やいわゆる形容動詞に接続する「ク」「ニ」「デ」(例：暖かく、真っ赤に、真っ赤で)の具現環境を分散形態論の枠組みから分析を行った。Nishiyama (1999)ではこれらの形態素はPredという主要部の異形態であると提案されてきたが、本研究では「通時的な変遷」をもとに「ク」と「ニ」に関しては一つの主要部の異形態だが、「デ」は別の主要部に具現する形態素であることを提案し、二つの学会で発表し、*The Morphology of Japanese Pred Revisited* と題した論文として国際学会プロシーディングス(Proceedings of the 12th Generative Linguistics in the Old World in Asia & the 21st Seoul International Conference on Generative Grammar)に公表した。本研究は近年Matushansky (2018, 2019)で検討されているPred主要部の理論的実在性について、日本語からの必要性を改めて提示することができる。

2020年度は、「手洗い」のような動詞由来複合語に焦点を当てた。これらは、英語のhand-washのような複合語と異なり、直接時制辞を伴うことができず、軽動詞「ス(ル)」の介在が必要となる(例：My mother hand-washed all the laundry. / 母が洗濯物をすべて手洗した。(cf. *手洗った))。動詞由来複合語の分類や内部構造については多くの研究があるが、なぜ日本語の場合は、直接、後続要素を取れず、軽動詞スルが介在しなければならないのかについてはそれほど積極的な議論はされてこなかった。本年度はこの点について現象を整理し、複合語の内部構造および軽動詞スルの具現条件の解明を目指した。具体的には、範疇未指定主要部(Song 2020)を援用し、さらにChomsky (2013, 2015)以降、生成文法の研究課題となっているラベリング理論に基づき、

(a)動詞由来複合語をはじめとする動名詞の派生には、範疇素性が未指定の主要部が関わっており、それが Voice 主要部への移動を不可能にしている、(b)軽動詞スルは、Voice が語根と局所的関係にない場合に具現する形態である、という本研究課題の骨格とも言える新たな仮説を提案した。本研究に従えば、「自他の対立が、XP 内部(の交替)で起こるか、もしくは、軽動詞の交替によって起こるかを決定する要因は何か」という問題は動詞主要部 v が XP 内部に含まれるか軽動詞側に含まれるかという形態統語構造の違いから説明される。つまり、「 $\{_{XP}$ 値上げ/値上がり}する」の場合、XP 内部に v が生じ、自他の形態が具現され、軽動詞スルは Voice に具現される。一方、「赤く{する/なる}」の場合、スル/ナルは v -Voice からなる複雑主要部に具現される。すなわち、XP 内部であれ、軽動詞であれ、自他の交替は動詞主要部 v の有無に大きく関わる。本研究成果は 2021 年 6 月に開催された日本言語学会第 162 回大会で発表し、予稿集に公表した。なお、現在さらに加筆修正を行い論文を投稿する予定である。

最終年度である 2021 年度は 2020 年度に開発した作業仮説をもとに、「XP+軽動詞」の形式をもつ言語現象の分析を統合し、軽動詞「スル・ナル」の出現を制御するメカニズムの開発を行った。結論としては、軽動詞「スル・ナル」は Voice 主要部に出現する形態であるという仮説、すなわち、軽動詞スルは Voice 主要部の非該当形であり、軽動詞ナルは外項を取らない Voice 主要部が動詞主要部 v と局所関係に現れる具現形である、という新たな提案によって「XP+軽動詞」における「スル・ナル」の分布が正しく予測されることがわかった。また本分析は主語尊敬語と目的語尊敬語にも敷衍できる可能性があることを示した。本研究成果は 2021 年 9 月に開催された Morphology & Lexicon Forum 2021 にて発表を行った。

これまで、日本語の Voice 主要部の理論的実在性については他言語との比較などから統語的・意味的観点から保証されていたが、本研究により日本語においては形態的にも Voice を想定する理論的妥当性が保証されることになった。さらに、本研究の提案が正しいとすれば、これまで独立して研究されてきた「動名詞」は、「動詞由来複合語」と厳密には同じシステム(主要部と主要部の併合および範疇素性共有によるラベリング)で派生されることになる。このことは、他の複合語(複合形容詞)の派生や主要部と主要部の併合におけるラベリングメカニズムの解明に大きな意義をもつことになる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Takayuki Akimoto	4. 巻 なし
2. 論文標題 The Morphology of Japanese Pred Revisited	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the 12th Generative Linguistics in the Old World in Asia & the 21st Seoul International Conference on Generative Grammar	6. 最初と最後の頁 400-408
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋本隆之	4. 巻 なし
2. 論文標題 X-V型の動詞由来複合語とスルの具現について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本言語学会第162回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 200-206
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Takayuki Akimoto
2. 発表標題 Revisiting predicative copulas in Japanese
3. 学会等名 Current Topics in Asian Linguistics
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takayuki Akimoto
2. 発表標題 The Morphology of Japanese Pred Revisited
3. 学会等名 GLOW in Asia XII & SICOGG 21
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秋本隆之
2. 発表標題 X-V型の動詞由来複合語とスルの具現について
3. 学会等名 日本語学会第162回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋本隆之
2. 発表標題 動名詞文の自他交替と「する」・「なる」の分布
3. 学会等名 Morphology & Lexicon Forum 2021
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関